戦國豔桃絵巻
成人向図書

あっ
戦國艶桃絵巻
こんな汚い男達にいいようにされて……
く……まさかこんな戦で負けてしまうなんて……

お仲間さんはもうすっかりお楽しみだぜ？
!?
ヌル
ヌニュ
へっへへ……まぁそう言うなって
やめて……くだ……さい……
も……もう
はぁ
はぁ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ブルンッ
ボタッ
ボッ
戦姫さん!?

ぶちゅッ
はっ
ひぃぅ
はっ
んぶぅ
こんな……
お尻……でぇ
あ……
あぁ……
はぁ
あぁ
んろぉ
んろぉ
これ……以上
はぁ……ら……めぇ

ズッズッ
イッ
ズッズッ
ズッズッ
ビクッ
あぐ
ちゅん
あぐ
はぐ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ん住おぐ

（うぅ……勃起した男性器でお尻、擦られて……熱くて硬くて、……こんな、のお）
や、やめてくださいっ！　捕虜とは言え、このような扱いは……ひいうッ!?　ダ、ダメです……そんな、風にこ、擦っ、ちゃ……んっ！　……ふ、く……ンンッ！……ふ、あ、あぁ……も、もう、やめ……ンあぁあッ！こんな……こんな、の……もお、嫌……なのに、い……どう、して……私……んっ、あ、あぁ……んひいい～
はぁ……ふ、あ……はぁあ、はぁ……んっ、く、……くふぅ、あひぁ、あぁ……お、お尻、イヤぁ……お願い、ですから……擦らない、でぇ……んぁあアアッ!?
ウルザ＝プラナアイス

いっ、痛ッ！ 痛いいいいっ、くぁあぁッ!? や、やめっ
ひぎいいいイッ!? な、なんで、こんな……は、ぐぅ、
く、ぐぁあ……きヒッ、く、や、ぁあぁ……かふッ、ごぉ
アソコ……に、喰い込んで……このままじゃ、さ、裂けて
……裂けて、しま――んぐぅふぅぅぅぅう～～～～ッ!?
こんな……どうして、
ンッ、ぐ、……んぁあ！
痛……いい……ぐぅ、い
……は、ぐぅ……あ……
……はぁ、はぁ、あ
ぐっ、ひ、うぅ……
か――ふ、ぁあッ！

ひぐっ！　い、ぎ、やぁあああアッ!?
痛ッ、痛いィッ！　お尻、お尻裂け――
ぐヒィイイイイッガァァァァァァッ!!
抜いて、もお抜いてぇえぇおおあぁヒィ!?
ひ、酷い……い……こ、んな、の……
う、ぐ……く、ふぅ……んぐ、か、ふぁあ
そ、……ま、前にも……なん、てぇ……。
同時に、前も、後ろも……は、ぐぅう！
ん、あっ……ひゃぐッ!?　お、ぅあ、う
この、ままじゃ……頭、おか、しく……。
なってしま、うぅふぅうぁあぁ……ッ♥

……は、はい……おチンポに、ご奉仕、します……ッ♥
捕虜の、私は、惨めなチンポしゃぶり女が、お似合いです
から……ぁ♥ は、ぁ……チンポ、すごい臭い、ですぅ♥
このチンポも、こっちのも、そっちのも♥ どれも、
何日も洗ってない、スゴい匂い……っ♥ チンカスも、
たっぷり溜まってますぅ♥ あぁ♥ 匂いだけじゃなく
味の方も……ンッ♥ ふ、おお♥ 頭、チンポでオカシく
なりそおです……ふぅ♥ ……はおおッ♥ おチンポぉ♥
はぁあ、おチンポぉ♥
チンポ汁、オッパイに
乳内射精されてるぅ♥
ふぅ、ンッ♥ はぁあ、
チンポまみれぇ……♥
捕虜、最高♥ れふぅ♥

はぁ、はぁ……ンッ♥ おチンポ汁、溢れてきちゃった……ふぅ、こんなに、膣内に射精されたら……やっぱり妊娠……してるかしら……フ、フフ。ンッ♥ まだ、熱い……♥ ……明日もまた、一杯犯されて……は、あ♥
明日は、一体どれだけ膣内に射精されちゃうのかしら……♥ ……ふ、ぅン♥ やだ、まだ垂れてくる……♥ 子宮までチンポ汁満タンで……あぁ♥ こうしてるだけで、私、またイッちゃいそう……あ、は♥
あァンッ♥ ……フフ チンポ汁、勿体ない♥ どんどん垂れちゃう♥

～戦姫～
く、ぐ……ひぐ、あぁアッ！　ぐ、ぅ……う、あ……がっ、ひぐぅぅウウ！
（魔軍相手とは言え、不覚をとったな。よもや、魔物がここまで強いとは……私の戦運も、どうやらここまでか……）
ひぃ……ぐっ、はぐ、……んアッ！……ひ、ひと思いに……殺せば、いいものを……く、ふふ……この、まま、魔物に犯され……嬲り殺しか……ぐ！
はぁ、グッ、かハッ！……う、……おお、うは、あ……ひぐ、ああ
ビクッ
ビクンッ
ズンッ
ズッ
ジュプ
ズッ
ズンッ
ビュブッ

《こ、こいつら……どれだけ犯せば、気が済むのだ……駄目、だ……意識が、朦朧と、して……頭、おかしくなり……そう……んっ、ぐ……馬鹿、な。魔物、だぞ……魔物相手に……魔物に犯されて、感じるなど――》
ヒッ！ ひぐっ、きぃひィァアあああッ!? や、やめ、はぐぅウッ!? お……ご、ほおお、おおお……ぐ、ぁ……い、やだ……魔物、相手に……くひッ!? はお♥ お、うあああ!? ……ンッ♥ ふ、ぁああ～～～ッ
や、やめ……んひぃいッ!? そ、んな……突かれ、たら子宮、まで……はぐぅう！ 届……くぅ♥ 魔物の……ちん、ぽ、が……っ
いや、だぁ……ッ！ 魔物のチンポで、感じるなど……はっ、ぐぅ！ ひぃおぉお♥ 射精されて、るぅ♥ ナカ、熱……い、ィイ……んぁあ♥
《もぉ……駄目、だ……うっ……、……ラ、ン……――》
ピクッ
ビュッ
ビュッ

～数刻後～
……それで、結局コレか。……助けてくれた事には感謝しているが、これでは魔物共に犯されていた時と大して変わらんではないか。……ん？　フフ。流石に魔物と同じ扱いは悪かった。……ああ、ありがとう。……仕方がないな。今日くらいは……ンッ♥　ふむ、ちゅぷっ、ちゅる……れろ♥　ペロ、ペロ……ふぅ♥
どう、だ？　……もっと、激しくか。……わかった。……んんッ♥　ふぁ、むちゅっ♥　じゅぷ、れろ……ペロ♥……ん、ふ、ふふ……ンちゅっ♥
フフ……ああ、いやなに。……たまには、こうして女の悦びに身を委ねるのも良いかもしれん……なっ♥……ンッ、ちゅぱ、はむ♥
レロ
ピチャ
ピチュ
ズチュッ
ズッ

う、うおおえええッ……犬、臭い……鼻曲がるうなんでノワールが、こんな……イッ!? イヤ、ああああ
ハッ
ハッ
ズリッ
ビクッ
ズボッ
やっ、やだやだヤメローッ! ノワールは犬の相手なんて絶対に――ひいいイッ!? や、ィ! ウ、ソお……だ、んあああアッ! 犬の、犬のチンポを胸に、なんて……イッ、イヤアアア!? 嫌ッ、嫌だンぶうウッ!? ゲフッ! ンゴ!? ひ、ぐ……う、うえ……な、なに、コレ? 犬チンポから……汁、イッパ――ッんぶうう! ブッ、ブハッ! やっ、なんでこんなに、汁、射精しすぎ――ブおオッ!? んお、おお……ッ
犬チンポ臭くて、ヒッ、ク……熱いい……う、グスッ……うう犬にパイズリなんて、やだぁやぁ、なのに……い、なんでぇ……胸、ひうウッ♥ は、ぁ♥
ムニュウ
～東方護天ノワール～

お、おほおおおお♥　犬チンポ射精え♥
止まらなひよお……はぐっ、おほお♥
しゅごッ！　しゅごいのお♥　ヒンポ汁
しゅごい量射精してゆぅ♥　おふッ!?
溢れ、あふれひゃッ♥　ノワールのお、
オマンコ、子宮まれ犬チンポ汁でおお♥
イッパイ♥　イッパイになっへンンッ!?
おおおおほおお～～～っ♥　あぇハァ♥
ズッ
ズチュッ
ズッ
ズッ
ズヌッ
ズプッ
ビクンッ
犬チンポお♥　きもひィいよお♥
ノワールのオマンコお♥　イヌの
チンチンで寒がっひゃっへおお♥
ひゃヒッ!?　ンヒィイッ♥
はうっ、ハァ……～～～～ああッ♥
ごめン……ましゃむねぇ……
のわーりゅ、イヌのよめに♥
なっひゃったぁ♥　アあ♥
アハッ♥　アハハ♥　ンッ！
イヌヒンポお♥　しゅきい♥

～火鉢～
ンッ……ふむ、ちゅっ♥ レロ、れりゅ じゅぷ、ぬちゅ……ふむぅ、……ふぁ♥ ……たくさん射精したけど、どう？ キモチ、良かった？ ……う、ん……。 まだ、硬いけど、チンポ……もう一度 射精すのか？ ……うん。わかった……。 でも、他にもまだ待ってるのに……ン、 ……時間はあるから、いい？ なら――
もっと、強く扱けばいい？ それとも 優しくゆっくり、する？ ……んっ♥ ……両方交互に？ ……やってみる。 ふぅ、は、あっ♥ ……さっきよりも、 硬くなってきた……んっ♥ ふぅ、んン 精液……たくさん、出てきた……ふぁ♥ ……どう？ ……チンポ、まだ射精す？
……はむっ、ん♥ ちゅっ、 ちゅぷ、ペロ、ペロ……。 ンりゅ……じゅぷ、はぁあ♥

ンッ♡　激しい、のが……いいの？　ングッ！
ゲホッ、ケフ……ん、ああ……大丈夫、だけど
チンポが、大きくて……むぐっ、ンッ、ふブ、
ふ、ハアッ……咽、詰まりそうに……おグッ!?
……ふう、は、あ……んちゅ♡　ちゅ、ヌプ♡
……ハア、ハア……
あと、何本……ンッ♡
ふう、ああおおお！
ふっ、ああ……ふう♡
チンポ……まだ、まだ
たく、さん……うン♡
ズプ
ブプッ
ブプッ
ぷるん
キュッ

～黒姫～
《だ、駄目……こんな、の誰かに……聞かれてしま――》んんンッ～～～ッ!? む、ふぅ！……んぅ、アッ♥ は……っ♥
「あれ？ 今、黒姫様の声が聞こえたような……」
～～～～ッ！ ンッ ふ……む、くひィ!?
《殿方の……お、おチンポが……奥、まで、届いて……し、子宮……押され……ッ このまま、では……声……》～～～ッ!? はっ！ ヒィ♥ んむっ、ふうううぅん♥
……はぁ、はぁ んっ、む、ん――ッ!? 《でもせめて……せめてもっと別の場所で……》
んっ、むぅ……はぁ……んヒッ!? ぐぁ、ふぅ……んむぅ 《見も知らぬ殿方のおチンポに貫かれるのが……こんな、にキモチ良い、なんて》
ブル
はぁ
はぁ
ブル
グニュ
ムニュ
ムニュ
ブジュ

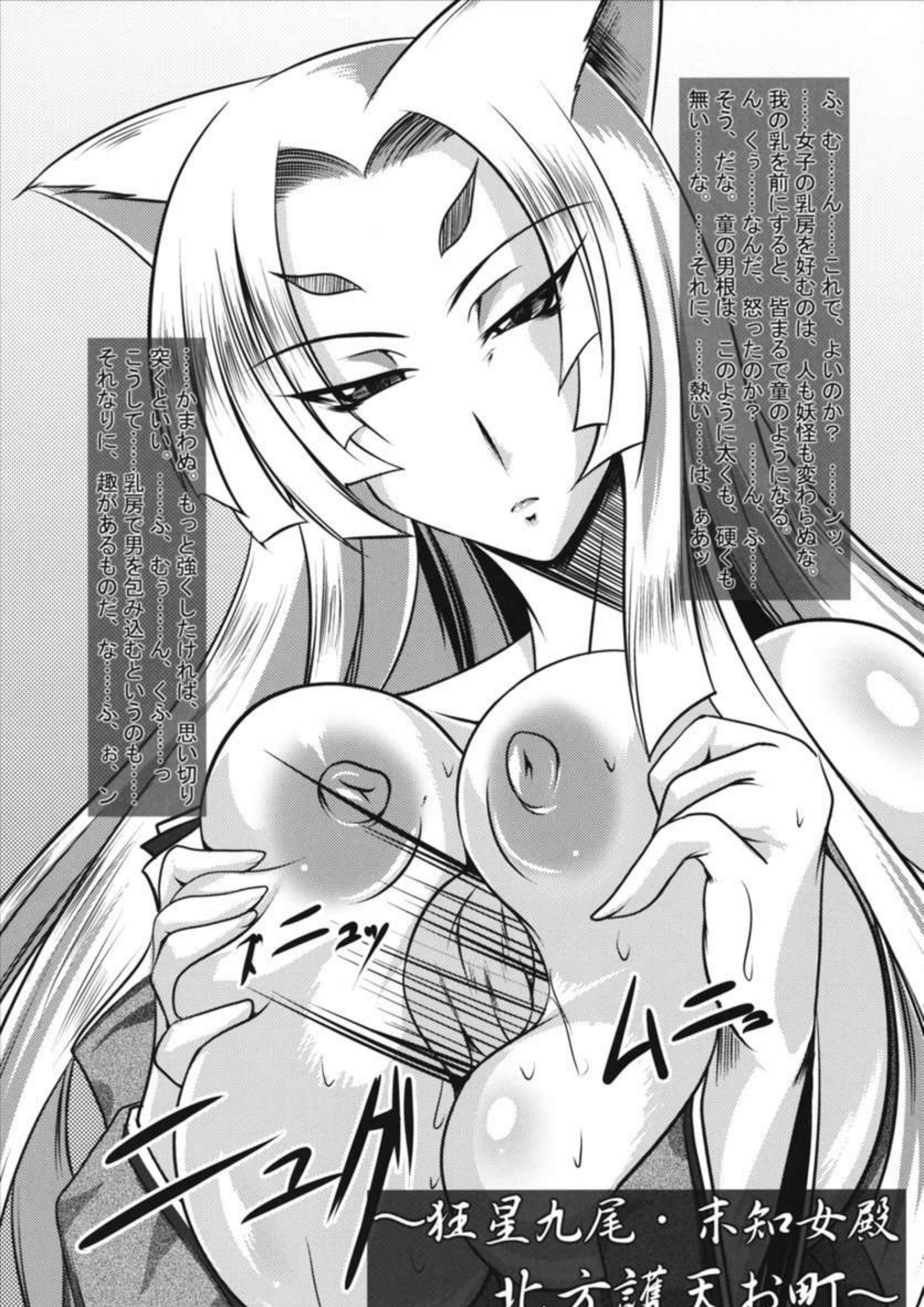
（……ああ、せめて人気のない場所をと言いはしましたけれど、まさか兵舎で足軽の皆さんの相手をさせられるなんて……うっ！　血と、汗の匂いが……あ♡）
こんなに、大勢の……はアンッ♡　殿方の、おチンポに囲まれたら……ひっ、やぁあッ♡　匂い……イ♡　チンポの匂いで、狂わされてしま……ふううンッ♡　いけ……ません、こんな、こと……おお♡　駄目、なのにぃ♡　おチンポに、逆らえない……ンッ♡　ふぁ♡
はっ、ううぅあぁあッ♡　足軽の皆さんの……勃起、おチンポお♡　戦帰りの、饐えた匂いが……ああ匂いで、犯されてしまいますぅ♡　ンッ、はぉ♡　おおおふぁあッ♡
しゅるルッ
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ
ぃニィ

～鈴女～
やれやれ、乱暴でござるなぁ。そんなにがっつかなくてもちゃんと全員相手をしてやるでござるよ。これでも一応鈴女も捕虜としての立場は弁えてるつもりでござる。んっ♥ フフ……酷い匂いでござるなぁ。このチンポ、最後に洗ったのはいったいいつでござるか？ ……ん、はむっ♥ ……はぁ♥ この恥垢の匂い、たまらんでござるなぁ。戦場で犯されてるって感じが……ひゃんっ♥ あ、ああ♥
うんッ♥ あ、く……す、鈴女も、イイ感じになってきたでござる……ンッ♥ 毒なんて、仕込んでないから……思いっきり突いて、大丈夫でござるよ？ ……んぁあぁっ♥ も、もっと、激しく……あんっ♥ あっ♥ く、ふふ……ランス以外のチンポは……久しぶりでござるけど……んっ♥ こういうのも、たまにはイイで……ふぁあっ♥ おっ♥ ……ご、ござる、な……っ♥ んぁぁあっ♥ はぁあっ♥ んっ、ひぅぅぅぅぅぅッ♥ も、もっとイッパイ、ふぁあぁあっ♥ みんな、あっ♥ 愉しむでござる、よ♥
ドプッ
ゴプッ
ビクッ
ビュクッ
ズブッ
ズブッ
ジュッ

～南条蘭～
お尻でなんて、イ、イキたくないのにいッ！やだ、やだぁあっ……ひぎぃいいイイイ～ッ!?抜い、てぇ……お尻からチンポ抜いてよぉ！ひゃっひやぁあアァ!?ヒィッ、お、あおおッ♥
も、もぉ……許し、てぇ……うっ、ふ、んぁあぁッ！お尻……精液で……パンパンになっへ……うぅ……い、やぁ……早、雲……助け……ひゃひぃいイッ!?や、やぁあっ……もう、チンポやだぁあ……ッほ、おおお……んぁあぁっ！　んぎぃ、ひィあぁあ♥
ご、めん……早雲……グスッ……こ、んなんじゃもう、早雲のお嫁さんに、なれない、よぉ……ふぁあ!?んぁあっ、お、おおおッ♥
ビクッ
ビュルッ
ビクッ
ビュッ

～見当かなみ～
ちょ、ちょっとドコに挿入れようとしてんのよ!?
や、じょ、冗談、よね？　そんな、まだ濡れてもいな――ヒッ！　や、やめ……そんな、お尻の穴スリスリって……へ、変態ッ！　これ以上は、ほ、本気で――ッッ！　ぎひいいイイイッ!?　はっ、ぐ、かぁ……はぁッ……！　……え、な……あ？
い、やぁ……お尻、ズブズブって……痛ッ！
濡れてもなかったのに……ぐィ!?　い、う、
さ、裂けたらどうするのよぉ……ンッ、
……ふ、くぅ……は、あぁ……はぅ、ぅ？
な、なんか……変に、……ンッ、はぁあ♡
おか、し……これ、ちょっと待ッひおお♡

～マジック＝ザ＝ガンジー～
～直江愛～
くっ、……ど、どこに射精すのかと思えば、こんなトコロに……そっ、そんな、まだ――ンぷッ！　ヒゥッ!?　な、なんて量を……う、ンッ……生臭い精液……いっぱい、ふぁ♥
キャッ!?　ちょ、ちょっと！　オデコに射精すなんて何考えて……ヒッ！　ま、まだ射精るの!?　やっ、精液垂れて……ンッ、……は、あぁ……うぅ、ドロドロするぅ……こんなの……は、あぁ……♥
ビュッ
ビクッ
ビクッ


ふ、む……ん……これで、よいのか？　……ンッ、……女子の乳房を好むのは、人も妖怪も変わらぬな。我の乳を前にすると、皆まるで童のようになる。ん、くぅ……なんだ、怒ったのか？　……ん、ふ……そう、だな。童の男根は、このように太くも、硬くも無い……な。……それに、……熱い……は、ああッ
……かまわぬ。もっと強くしたければ、思い切り突くといい。……ふ、むぅ……ん、くふ……っこうして……乳房で男を包み込むというのも……それなりに、趣があるものだ、な……ふ、お、ン
ムニュ
ムニュッ
～狐星九尾・未知女殿
北方護天お町～

～リズナ＝ランフビット～
あぁあぁあぁあぁあッ♥　ふぅ、はぁンッ♥
おいしいよぉ♥　男の人のおちんちん、
すごくおいしいのぉ♥　ふぁあアッ♥
おっぱいのナカでビクビクって、あふぅ♥
おチンポぉ、ふるえてるのぉ♥　んハァ！
せーえきぃ♥　チンポ汁ほしいよぉ……
ねぇ、はやくのませてぇ？　チンポ汁ぅ♥
はぁ
はぁ
チンポぉ……おチンポぉ♥　ひぁアンッ！
おっぱいキモチイイッ！　……ふぁあ♥
おチンポぉ♥　あつくてぇ、かたくてぇ、
すっごくぅ、くさいのぉ……ぬふ、おぉ♥
やアンッ♥　チンポしごくぅ♥　もっと
おっぱいでぇはさんでおチンポ汁しゃせー
させちゃうからぁ♥　んほぉおおおぉッ♥
ムニィ

～◆～

――この男といると、本当にいつもろくな目に遭わない――

「……んっ、こ、この……っ」

「がははははは！　久しぶりなのだから、お前も楽しんだ方が良いぞ。……ほれ」

「ひぅうっ⁉」

股間を撫で上げる手は意外と優しく、志津香はくすぐったいようなもどかしいような、中途半端な感覚に身体を震わせた。

ろくな目に遭わない上に、こうして予想外の事ばかりするのだ、この男、ランスは。てっきり強引に指を這わせてくるかと身構えていたところを不意打ちもいいところだった。

「ちょっ、あんた……い、嫌だったら……っ！」

「ふん。今さら何を言うか。『マリアの部隊に援軍を送ってくれたら何だってするから！』と涙混じりに頼み込んできたのはお前の方だろーが」

「ぐっ！　……そ、それは……そうだけど」

武田との戦の折、後方からチューリップ部隊で支援砲撃をしていた志津香の親友マリアの部隊が、騎馬部隊による予想外の攻撃に晒され孤立したと聞いた時、志津香は取るものも取り敢えずランスの本陣に飛び込むとマリアを助けてくれるよう懇願したのだ。

チューリップ部隊は戦においては比類無き威力を発揮するが、一度近付かれてしまえば脆い。しかも武田の想像以上の強さの前に織田各部隊は疲弊も激しく、とても救援が間に合うような状態ではない――志津香は、そう思っていた。だからこそ『何だってするから』とまで叫んだのだ。

……なのに、蓋を開けてみれば、なんというか。

「ひゃんっ⁉」

上着の裾からスルリと入り込んできたランスの指が乳首を優しく抓み、さらに腹の部分でこね回す。本当に、珍しく優しい愛撫だった。こんなに優しく触れられたことが、これまで何度と無くこの男に抱かれてきた中で一度としてあったろうか。

「うっ、……は、あぁ……んっ！」

「ほーれほれ。志津香、我慢は身体に毒だぞう？　俺様の超絶技巧でさっさとメロメロになってしまえ」

「だ、誰が……んはぁあっ⁉　……あ、あんたの……指、なんかで……こ、この、大嘘吐きの……卑怯者！」

「むぅ、卑怯者とは心外だな。俺様がいったい何をしたと言うのだ？　がはは！」

「どの、口で……はっ、んぁああっ！」

――本当に、なんて男なんだろう――

涙混じりの志津香の懇願に、ランスは珍しく真面目な顔で唸ると全軍の配置図を睨み、マリアの部隊がいる山間部を指でトントンと突いて眉間に皺を寄せた。

武田の機動力を甘く見すぎたのだ。手羽先による騎馬部隊がまさかここまで縦横無尽に戦場を駆け回るとは、父がJAPAN出身の志津香でさえ、武田の強さには絶句するしかなかった。

マリアを助ける術はない。軍を率いる経験は浅い志津香でもそのくらいはわかっていた。それでもマリアを、親友を見捨てるなんて出来るはずもない。

たとえ一人だけ、困難な転移魔法を使ってでもマリアを助けに行こうとする志津香の腕を掴んだランスの胸に泣きついて、泣き喚きながら懇願して――

――その直後のランスの顔なんて、思い出したくもない。

「まったく。約束通りマリアのことは助けてやったろうが。感謝されこそすれ、卑怯者呼ばわりされるいわれはないぞ」

「う、うぅ……」

そう。

ランスは自らの胸の中で呆気にとられた志津香をニンマリと覗き込むと、あっさりと右腕を挙げて伝令に指示を出した。

最初からマリアを見捨てるつもりなんて毛頭無かったのだ。

『マリアは俺様の運命の女の一人だぞ？　見捨てるなんてあるわけ無いだろうが』とはその後に詰め寄った際の弁。

マリアの部隊のすぐ側には鈴女と月光の最強忍者部隊が文字通り忍ばせてあり、マリアの部隊へと襲いかかろうとした騎馬隊はまんまと仕掛けられていた罠に掛かると手裏剣とチューリップの雨霰を浴びて壊滅してしまった、というわけだ。

怒りに肩を震わす志津香を抱き締めたまま、『さーて、じゃあ今夜は久しぶりに俺様の相手をして貰おうか。がはぐほぉ!?』とランスが殴り飛ばされたのも、まぁ当然の成り行きであり――

「……は、あっ」

――なんだかんだとこうして志津香が抱かれるのを了承してしまったのも、やはり当然の成り行きなのだった。

（もう……本当に、……嫌になる）

どんなに悪態を吐いても、どんなに大嫌いだ触るな近寄るなと叫んでも、結局はいつもこうしてランスに抱かれてしまっている現実に志津香は辟易としていた。

「んっ、く……む、んぅうっ」

志津香の敏感なところなどまるで知り尽くしているかのような、いや、事実として知り尽くしているのだろう。そう考えると嫌々ながらもつい笑みが洩れてしまう。

「ん～？　なんだ、そんなにキモチ良かったか？」

「……うっ、さいわねぇ……ふっ、く……」

感謝しているのは本当だ。

騙された、とは思うものの、何だかんだでマリアのために万全を期していてくれたのも。

同時に、思う。

（……私の事も、マリアと同じように……考えてくれてるのかしらね？）

魔法部隊もチューリップ部隊と同様、近付かれてしまえば脆い。今回のマリアと同じようなことが、志津香の身にも起こりかねないのだ。だからそんなくだらない事を考えてしまう。

（ランスの……運命の女達、か）

腹立たしい。忌々しい。だいたい、運命の女〝達〟って何なの

かと怒鳴り散らしたくなる。
……なのに拒めないのは、自分もマリアと同じく馬鹿な女だからなのかも知れない。
「ひぅっ！　……んっ、はぁ……あっ♥」
甘い声が漏れ、視界が蕩けていくのを実感しながら、志津香は悩ましげに睫毛を揺らした。

■■■

「……んっ、く……」
「がはは！　いいぞ、上手いではないか」
訂正。
やはり馬鹿なのは自分でもマリアでもなく、この男に違いない。
志津香は自分に奉仕させて満足げに仰け反りかえっているランスの肉棒を思いっきり噛んでやろうかとジト目で睨め上げた。
「ん～？　なんだ、俺様のハイパー兵器が久しぶり過ぎて感動してしまったか？」
「……誰が、よっ！」
マリアの件で感謝しているのは事実だし、何でもすると言ってしまった手前、『たまにはお前にも奉仕の精神というものを養って貰わんとな！　がははは！』と言うランスのふざけた命令にも渋々従いはしたものの、こう好き勝手なことをほざかれると頭に来るのはどうしようもない。
（たまに見直した時くらい、浸らせてくれても良いじゃないの）
やはり運命の女だなんてありえない幻想なのだと、ランスの剛直を胸に挟んで扱きながら志津香は嫌々ながらに舌を伸ばした。
「おほっ！　いいぞいいぞぉ、ぐふふふ」
さっさと終わって欲しいものだ。そんな思いが、志津香の動きを自然と激しいものにしていく。結果としてランスも気持ちよさそうにしているのなら充分だろう。
「ふっ……ん、ちゅ……んむ……はぁ」
考えてみれば、ランスと関係を持って長いがこうして口や胸を使うなどは滅多になかった気がする。……まぁ、普段からの自分とランスの関係からしてみればそれは当たり前のことではあったのだが、改めて、自分の奉仕に反応しているランスの顔を見上げていると志津香は不思議と嫌悪感が消えていくのを感じていた。
（……そんなに、キモチの良いものなのかしらね？）
自分がランスに秘所を指で弄くられたり、舐め回されたりしている時の事を思い出し、志津香は頬を紅潮させた。無理矢理が殆どではあったが、合意の上で抱かれたことも無かったわけではない。その時は……やはり、とてもキモチが良かったと、思う。
（あんな感じ……なのかしら？）
そんな風に考えていたせいかも知れない。
「……は、ぁ……んっ、ふ、むぅ……んくっ♥」
（え、ウソッ!?）
まさか、信じられなかった。
それでも自分の身体のことなのだから、わかる。
「んっ、……んん、……あっ、……ふぁ♥」
志津香は、奉仕しながら感じていた。ランスの肉棒を挟み込んでいる乳房が熱い。先端に口づけるたびに、唇にも不可思議な熱

ボッ
ボッ
チュパ
チュパ

が伝播していく。
（なに……これ……わた、し……変に……っ）
「お、おおおお……いいぞ、志津香……ぐっ、う」
いつも強引で、無理矢理主導権を握り、最初から最後まで終始好き勝手に振る舞うランスのこんな反応、もしかしたら初めて見たかも知れない。そう考えると、志津香の動きはさらに激しさを増していった。
（ランス……感じてる？）
「んっ、んんっ……ちゅむっ、ふ、むぅ……はぅうっ、……あ、ああっ……はっ♥」
必死になって感じている。
「おっ、おぉ……ぐぉおっ」
「ふっはぁ……んっ、はぁあああんっ♥」
――あのランスが、自分にされてこんなに感じている――！
それだけでどうしてだろう。志津香もまた昂ぶってしまう。自分を、抑えられなくなる。
乳首がカリ首に触れる。互いの敏感なところが擦れ合って、甘い声が重なり合う。
繋がっているのではない。女から男への一方的な奉仕であるはずなのに、志津香はその一体感に眩暈がした。
加速していく。全てが、狂おしく。
「んっ、ひぅっ、……くっ、はぅうっ♥」
「お、おおお……し、志津香、……ぐ、はは……射精るぞ！」
ランスがそう宣言したのと、志津香の視界が白く染まったのは殆ど同時だった。
「ひぁあっ、ふぁあああああああああんッッ♥」
白濁とした汁が、胸を、顔を、髪を汚していく。
今までにも何度もかけられてきたものなのに、今日の志津香には、その匂いも味も温度も、とても愛おしく感じられた。

■■■

「……はぁ」
正気に還れば零れ出るのは自己嫌悪の溜息ばかりだ。
隣で幸せそうに寝ている男の顔の、なんと小憎らしいことか。いったい何人の女が今の自分と同じ想いを抱いてきたことだろう。
「……ったく、なんでアンタなんだか」
頬を指で突いてやると、どんな夢を見ているのかモガモガと魘されるのがおもしろい。これで少しは溜飲が下がる。
「はぁ～あ。……ホント、馬鹿よね」
――その言葉は果たして誰に向けられた言葉か――
「……寝よ」
夜明けまではまだ時間がある。なら、せめてもう少しだけは、いいだろう。
隣の温もりに腕を回しながら、志津香は安らいだ笑みを浮かべて瞼を閉じた。

嫌ッ！　こんな所で無理矢理……嫌だって言ってるでしょッ!?　ひゃぁあぁッ!?　バ、バカッ……こ、の……いきなり挿入れる、なん、て……ふ、ぎぃイッ!?　はッ、あ！　さ、さっさと……抜き、なさい……よ！　ふぐっ、う、あぁ……ンッ、……いやッ♥
か、感じてなんてない、わよぉ！　アンタ、なんかに……犯されて、嫌だって……言ってる、のに……ひぁあぁアンッ♥　……く、うぅ、……なん、で、も、もぉ……はぁ♥
ビクッ
ビクッ
ズッ
ズッ
～魔想志津香～

～◆～

戦が好きなのは、血筋、父の教育の賜物もあったろうけれど、何より自分自身、エモノを手に戦場を駆け回るのが好きだったからだ。それは偽らざる本心であったし、またきく本人にしてみても偽るつもりは毛頭無かった。

また、女らしくない自分にコンプレックスがあったのも本当だ。物心着いた頃から、自分はどうにも目つきが悪いのだという自覚はあった。特に少しでも何か考えに耽ったり、照れ隠しに表情が強張った時など、酷い。眉間に皺寄せた状態の自分の垂れ目は、大の男が寝所から裸足で逃げ出すほどの凶相なんだと思い知らされた時は流石に涙が出た。

きくは、政略上とは言え一度は結婚し、毛利家を出た身だ。

その際の夫の事は、自分でも意外なのだが今でも良く覚えている。特にコレと言った秀でた才も無く、平々凡々とした男で、優しくはあったけれど、優柔不断で気弱な……要するに、ヘタレな男だった。けれど、きくは亡き母から妻としての在り方は叩き込まれてはいたし、きくなりに彼を愛そうと努力もしたのだ。

しかし、例えきくがどんなに料理が上手かろうと、駄目だった。

深夜、夫婦の営みに臨もうとするとどうしても恥ずかしさが拭いきれず、結果としてきくの緊張しきった凶相に怯えた夫は一度として抱いてくれたことはなかった。

なので、きくの処女を奪った相手は元夫ではない。

「……畜生、気持ちよさそうに寝やがって」

今、目の前でグースカと喧しい寝息を立てている異人。織田の現国主たるランスこそがきくの初めての相手であり……――

「……う～」

――こうして、頬を赤らめ唸りながらもついつい寝顔を覗き込んでニヤケてしまう、要するにきくが現在懸想している相手なのだった。

「なんだよ、呼び出しておいて寝てるなんて……相ッ変わらずとんでもなく失礼な野郎だぜ」

素っ裸で寝ているランスの頬を指で突きながら、きくは蓮っ葉な言葉遣いとは裏腹、穏やかな笑みを浮かべていた。

「……まぁ、しゃーねぇか。何だかんだで魔軍との戦は苛戦のし通し、仮にも大将だもんなぁ」

現在、ＪＡＰＡＮはアフリカを除き全てが織田領と化している。残るはそのアフリカを統治する島津家だけ……という段になって、魔軍が現れ、侵攻を開始した。

魔軍を率いるのはかつての織田家当主、信長の肉体を奪った魔人ザビエル。島津の兵力と、禁妖怪の能力を使い攻めてくる魔軍に織田家は押されっぱなしだった。

今日も今日とでランスは出陣、かろうじて勝利したとは言え疲れて寝てしまっているのも詮無いことだった。

「あ～あ。どうしたもんかねぇ」

優しくランスの髪を撫でながら、こうしていても仕方がない、彼が目を覚ました時のために美味しい料理でも用意しておいてやろうと、きくは今夜はひとまず暇することに……したのだが。

「……あ」

立ち上がろうとした瞬間、ソレが目に入った。

「うぇえっ」

思わず品のない声を漏らしながら、マジマジと見入る。
隆々と屹立した、見事なランスの……男根。
「な、なんで疲れて寝てんのにそんなトコだけ元気なんだよ！？」
思わず悪態を吐きながら、きくは視線を逸らせないでいた。
今ではもう見慣れてしまったランスの肉棒だが、こうマジマジと凝視していると、熱病に浮かされたかのように頬が紅潮する。
臍まで反り返ったソレは痛ましいくらいに血管を浮き上がらせ、ランスが呼吸をする度にビクンビクンと震えていた。まさに臨戦態勢、おそらくは寝落ちてしまう寸前まできくを抱くつもりでいたためなのだろう。そう考えると、一見醜悪な肉棒も可愛らしく見えてくるのだから不思議だった。
「……こ」、こんなに、ヤル気満々だったくせに寝ちまうなんて、ホント、なに考えてんだよ……ったく、よぉ」
ブツクサと呟きながら、きくはランスの気持ちよさそうな寝顔と元気極まりない股間とを交互に見やり、やれやれ仕方ねぇなと溜息を吐いた。
「勝ち戦……だったんだし、やっぱ、なんかご褒美……みたいなの、あげないとな。……うん」
言い訳がましくエプロンドレスをたくし上げていく。
「よい、しょ……んっ」
姉妹の中どころか、織田家全軍を見渡しても上位に位置するたわわな乳房が勢いよくまろび出て、プルンと震えた。こればかりは、女としてのきくの自慢でもあった。もっとも自慢出来るのも褒めてくれる相手がいればこそだ。
そして、その褒めてくれる相手であるランスの股間へとゆっくり胸を近付けていく。

「……起きるなよ～？」
ランスは、きくに胸で奉仕させるのが大層お気に入りだった。
元々はきくが彼に抱かれるのを怖れて、逃げるために仕方なく胸や手、口で奉仕していたものが、何だかんだと気に入ったのか処女を捧げてからも夜伽の際には必ず命じてくるのだ。
「へへ。……うん。た、たまには……こうして、うん。ま、まぁ、あたしからの……ね、労いってーか……」
一体誰に何を言い訳しているのかと心中で己にツッコミを入れながら、きくはランスの肉棒へと覆い被さっていた。
「……あっ」
まずは先端。
亀頭と乳首とがピクンと触れ、身体に微弱な電流が走った。
こうして敏感な部分が触れ合っているだけで、動悸が激しくおさまらなくなっていく。身体と身体を重ねるのがとても喜ばしいことなのだと、それを教えてくれたのもランスだった。
とは言えいつまでもこのままでいても埒が明かない。
「んっ……しょ」
胸の間に竿がぴったりと挟み込まれるように、そーっと身体を下ろしていく。起きてもらいたい気もしたが、何となくこのまま起こさないように奉仕するのもおもしろいのではないかと、そんな悪戯心がきくの中で首をもたげていた。
やがて脈打つ肉棒と乳房とが触れ合い、ランスの熱がじんわりと伝わってくる。
「あ……ふ、あぁ……」
その熱が、とても心地良い。
ランスの肉棒は、まるで最初からそこが居所だったのだとでも

言いたげにスッポリときくの胸の中に収まっていた。
「……はぁ……ん、……き、ふ……ンッ♥」
言葉に出来ないほどの一体感、喩えようのない幸福感がきくの全身に伝播していった。ランスを包み込んでいるはずなのに、逆に包まれているように感じる。いつもの事ながら、とても不思議な感覚だった。
「ふぅ……ふぅ……ぁ……ふ、はぁ」
こうしているだけで、蕩けてしまいそうだった。まだ微動だにもしていないのに、動き出すのが怖いくらいだ。それでも、きくは亀頭の先端部だけ谷間からはみ出させたランスの肉棒を眺め、少しずつ胸を動かし始めた。自分はこのまま触れ合っているだけでも心地良い。けれどランスはそうではない。寝ているとは言え、やはりランスにもキモチ良くなってもらえなければ駄目だ。きくだって、それでは物足りない。どこか満たされない。
「……よ、しっ」
小さく気合いを入れ直し、徐々に動きを速めていく。
ランスが感じてくれるよう、それでいて目を覚まさないよう細心の注意を払って、きくは乳房を動かした。
「んっ……く、……はぁ……んく、ふ、……う、ぅン……♥」
まるで荒れ狂う灼熱の鉄棒を扱いているかのようだ。怒張したランスの肉棒は、本人の呼吸に合わせて微かに震えているだけなのに、きくの柔肉をグイグイと押し上げてくる。
「……ん、ふぅ……ッ……ったく、……ほんと……どうしてこんなに……んぁっ、……ふぅ、……ぁ……熱くて……硬、くて……はぁ……ふ、ふぅ……ひぃ、う……ぁッ♥」
両側から強く乳房を圧迫する。そうしないと、内側からランスの剛直によって押し負かされてしまうとでも言いたげに、きくは一生懸命に挟み扱いた。
もしここでランスが目を覚ましたら、何と言うだろう。
「ふ、ぅ……んっ、はぁ……はぅっ、……く、ひぅ……」
……どうせろくな事は言わないに違いない。エッチだのイヤらしいだのとからかわれ、そのまま朝まで激しく、腰が抜ける程にヤラレまくってしまうのだ。
「……ッ！」
そう考えただけで、きくは臍の裏の辺りがキュンッと疼くのを感じた。トロトロと下着の中が潤っていくのがわかる。
もういっそこのままランスの上に跨ってしまおうかという欲求を、きくは寸でのところで耐えた。そんな恥ずかしい真似、今でさえ心臓が破裂しそうなのに冗談抜きで死んでしまうかも知れない。……そうして死んでもいいと考えている自分もいる事がまたたまらなく恥ずかしくて、きくはさらに頬を紅潮させた。
「うぅ……クッ、……ちくしょ……ン、ふぅ……ッ！」
頭の中がメチャクチャになっていく。
戦勝してきたランスへの労いのつもりだったのに、ほんの悪戯のようなものだったはずなのに、今の自分はケダモノのようだ。
ランスこそが所も相手も構わず手を出しまくる節操無しのケダモノだったはずなのに、自分もいつの間にか一匹のケダモノ、一匹の淫らな雌になっていたのだと痛感し、きくは艶めかしい動きで乾いた唇を舐めた。
水音が、鼓膜を震わせる。唇は乾いているのに、口内は唾液で溢れかえっていた。飲んでも飲んでも、まだ溢れてくる。その淫涎を、きくは自らの胸とランスの肉棒へとタップリと垂らした。

ムニュ
ムニュ
ニュル
ニュル
ニュル
ニュル

ヌチャリ、ヌチャリ、と。淫猥な音が真夜中の寝所に木霊する。
「う、んっ……は、あぁ……アッ♥　……ふぅ、んんっ」
唾液によって滑りの良くなった胸が扱く激しさを増していく。
このままランスに溶けてしまいそうだときくは思った。溶けてしまっても構わないと本気で思った。
戦が好きだ。戦場を駆け回るのが大好きだ。
けれど、その昂揚に勝るとも劣らない――杏。自分の中で勝るものを遂に見つけてしまったのだ。
亡き母がきくに望んだ、女としての生き方を。
「ふむっ、……ん、ちゅっ♥　んぷ、はむ、んぅ……っ♥」
谷間から飛び出た亀頭を銜え、舌を絡める。
裏筋を丹念に舐め、カリ首に舌を這わせ、鈴口をほじりながら、胸を動かすことも忘れない。
射精が近付いているのを、触れ合った肌を通してきくは察した。
もうすぐ、弾ける。
口の中で爆ぜさせるか、それとも胸か。顔で受けてやるのもいいかも知れない。どれもいい、きくにとっていずれもたまらなく甘美であるのには違いがないのだから。
「んりゅ……れろ……じゅぷ、ん、ちゅぷ……ぺロッ……ん、むふぅ……ンッ……♥」
ただでさえ大きかったモノが、さらに膨張していく。自分がそうさせているのだと考えただけできくの舌と胸はより強く、愛おしげにランスの肉棒を包み込み、昂ぶらせていった。
「ふぅッ♥　ん、……れりゅ、ちゅ、ふむぅ……ん、はぷ、……ああ、……はっ……ン、むぅううッ♥」
昂ぶっているのはランスだけではない。きく自身も、限界を迎えようとしていた。口の中にスッポリと亀頭を含み、割れ目を舌で刺激しながら、昇り詰めていく。
熱が、増す。
頭の中が真っ白になっていく。
そして――弾けた。
「ッ！　ん、ふぁあっ！　んぁあああああああああッ♥」
可愛らしい悲鳴を上げ、ランスの精液を全身に浴びながらきくもまた絶頂を迎えていた。全身をビクビクと痙攣させ、口中に入り込んだ精液や口の周りに付着した分を舐め取っては丁寧に咀嚼する。ランスの味を、噛み締める。
「んっ、……んん、……ふ、ンッ♥」
喉をドロリとした液体が流れ落ちていく。この瞬間が、きくは好きだった。まるで身体の内側、臓腑にまで全てランスが染み込んでいくかのような感触に、背筋が震えた。
「……は、ぁ……」
息も絶え絶え、ランスの上に倒れ込む。それにしてもまったく起きる気配がないのは流石と言うべきか、どうするべきか。
「……なのに……コッチはまだこんなに元気かよ……」
胸肉に押し潰されながら、まだまだ萎える気配も見せない肉棒が『がはは』と笑ったよう感じられて、きくは顔を顰めた。が、すぐさま不敵な笑みを浮かべると、ゆっくり胸を上下させ始める。
「……ま、まぁ、まだ朝までは……うん。時間あるし、な」
夜が明けるのが早いか、ランスが目を覚ますのが早いか、それとも、きくが力尽きるのが早いか。
この戦は、まだもう暫くは決着がつきそうになかった。

ジュッ
はぁ
はぁ
ジュッ
政宗ェ♥
政宗チンポぉ♥
こんなにいっぱぁい♥
ぷるん
ぷるんッ
じわ

政宗……ノワールだっておっぱいで

おチンポ気持ちよくできるんだから！……お町程じゃないけど

ニュウウ

ビクッ

あっ……♥

ビク

こっちの政宗も……♥

ニュン

ゴメンね……♥

ノワール頑張って全員満足させるから♥

シュコシュコ

ニュウ

あっ!?
チュクッ
きょ……今日はそっちで
スル……のか?
ひゃひいいいいいんッ♥
ビクッ
ビクッ
んおおおッ
ズッ
ズッ
ズッ
りょ
両方!?
んほお♥
ヌポッ
ヌポッ

こう コワッ

ノワールコワれちゃう
んひゅぁぁぁぁぁぁぁッ♥

ビュッ

ビュッ

ビュッ

ビュッ

ビュッ

ゴポォ

ビュッ

ふう……
しっかしこの薬って
妖怪にも効くんだなぁ

へへッ 流石は大陸から
取り寄せたブルーペット印の
催眠媚薬だぜ

ごくッ

ごくッ

ゴル

んっふっふー
どうでござるか？
鈴女のおっぱいと足は気持ちいい？
ビュルルッ
ランスはちん○んおっきいから
鈴女も本気だせるでござるよ。
…あら　もう出たでござるか
でもランスならまだまだイケるでござるよねー？

全然気持ちよくねぇぞー
あと2分でイかせねぇと
また飯抜きな？
「んむっ
むぅぅぅ」
アッハッハ柚美ちゃん
卑しいなぁ、必死だぞ
おっ・・・おっ
イくっ・・・！
ハ
ぶっ・・・
う・・・ぐぅぅぅ」
ドッ
ふぃ～射精た射精たー
ちゃんと飲めよ？
じゅっ
じゅっ
おーし・・・
膣内にもちゃーんと
注ぐぞっ・・・
「んっ・・・
はいっ・・・」
てめぇみたいな
マグロ女使用して
やってるんだから
しっかり感謝して
受け取れっ！
このっ！孕めッ！
オレのガキ
孕めよっ！
このマグロ女ぁ！
「うっ・・・ぐっ・・・！」
おっ・・・あっ・・・
「あ・・・熱いのがっ
膣内に・・・
あっ・・・」
あー・・・ったく
他の女がいりゃあ
こんなガバ穴なんて
使わねぇのによぉ
チッ

いつもは気取って
マグロだけどよ
ヤキ
コイツが昔
戦場で使ってた
火縄を使って
やると面白えぞ
あ・・・
こうして
ケツ穴にチ○ポと
マ○コにてめえの
火縄を挿入すりゃあよ
「んあぁあああぁぁぁあぁ
すごひぃいいっ
帚星っすっごい
よおお」
このとおりバカみてえに
喘ぎ叫ぶんだよ
気持ち良いか？
鉄のチ○ポブッ込まれて
「はいっ！帚星がっ
鉄チ○ポが気持ちいいいいッ！
最高に気持ちいいですっ！」
「射ってぇえ！
いっぱいいいいい
いっぱい射ってぇええ」
「ひっひいいいい」
「イぐっ
イッぐっう」
「死ぬっ
ひぬううう
ひッ
はッ
おっ
んおおおお
ああ
ああ
ああ
ああ

あとがき

はじめての方ははじめまして。そうでない方こんにちは。
この本を手にとって下さりまことにありがとうございます。
今回は戦国ランス本ということで、時期はずれながら
出してみました。
原稿中ウルザフィギュア化した夢をみた。

まだまだ自分はランスはにわかなのですが、原稿が終わったら
6の続きをやりたいと思います。
2のリメイクもでるらしいので凄く期待しています。

それでは今回のゲストをしてくださった水原さんとkojouさんに
感謝をしつつ、製作を色々協力してくれた忌呪さんには
感謝という言葉では語りつくせません。
それでは次回はサンクリでしょうか？また会いましょう。

そのうちまたランス本出します。

奥付

誌名	：戦国艶桃絵巻
発行者	：寒天
発行サークル	：寒天示現流
発効日	：2009/8/16

※18歳未満の購入、購読は遠慮してください。

戦國豔桃絵卷

弐千九年八月
漫画市場七拾碌
寒天示現流